

あきのくに やまぐちちょう いわむろ  
安芸国広島城下山口町 岩室家文書 目録

(『広島県立文書館 収蔵文書目録』第1集 所収)

広島県立文書館

平成24年(2012)6月

凡 例

- 1 本目録は、『広島県立文書館 収蔵文書目録』第1集(平成6年3月刊)に掲載された「安芸国広島城下山口町 岩室家文書」の目録である。
- 2 目録の各項目は以下のとおり。

請求番号 本文書群の群番号(198813)と、この項目の記号を組み合わせたものが請求記号になる。

【例】 28/1      198813 / 28 / 1

表 題 資料にある原表題をそのまま採った。

年 代 資料に記された作成年月日を採った。

作 成 資料にある作成者名をそのまま採り、資料に授受関係のあるものは で結んで表記した。

形 態 資料の形態を記した。

数 量 資料の点数を記した。
- 3 文書の排列は請求記号順とした。
- 4 利用の参考のため、本文書群の解説を冒頭に付した。

# 解 説

## 1 岩室家文書の由来

開館直後の昭和63年11月16日付けで、所蔵者の岩室良氏の御厚意により、岩室家文書のうち、「私的」な、たとえば旅行記や、和歌・俳諧・漢詩といった文芸資料などを除く、広島城下町の行政・財政に関するものを中心とした古文書56点の寄贈を受けた。したがって、ここに掲載する岩室家文書目録はその全貌ではないことを最初に断っておかねばならない。

岩室家は、享保年間から明治2年まで五代にわたって、広島城下町に置かれた五つの町組（図1参照）のうち、新町組（末尾の図2参照）の最高責任者である大年寄を勤めた、城下町の有力商家の一つである。原爆などによって、広島城下の商家・町文書のほとんどが失われたなかで、この岩室家文書は、所蔵者の御苦労によってその一部が疎開していたため、南区京橋町の松井家文書、広島大学文学部国史研究室所蔵の堀川町文書などととともに、かろうじて今日まで伝わったものである。岩室家文書は、その意味でも貴重な古文書といえることができる。

岩室家文書は、『新修広島市史』（昭和35年刊）にも一部の文書が引用されたことがあったが、広島県史編さん室が、昭和43年12月19日に市内宝町の岩室家文書を調査して全344点の目録を作成し、そのうち91点についてマイクロ撮影した。『広島県史』近世資料編III（藩法集1）には、3点を掲載させていただいた。県立文書館では、開館に際してそのフィルムと複製資料を整理し、所蔵者の許可を得て写真版によって利用できるようにしている（その目録は『広島県立文書館複製資料目録』第一集に掲載）。

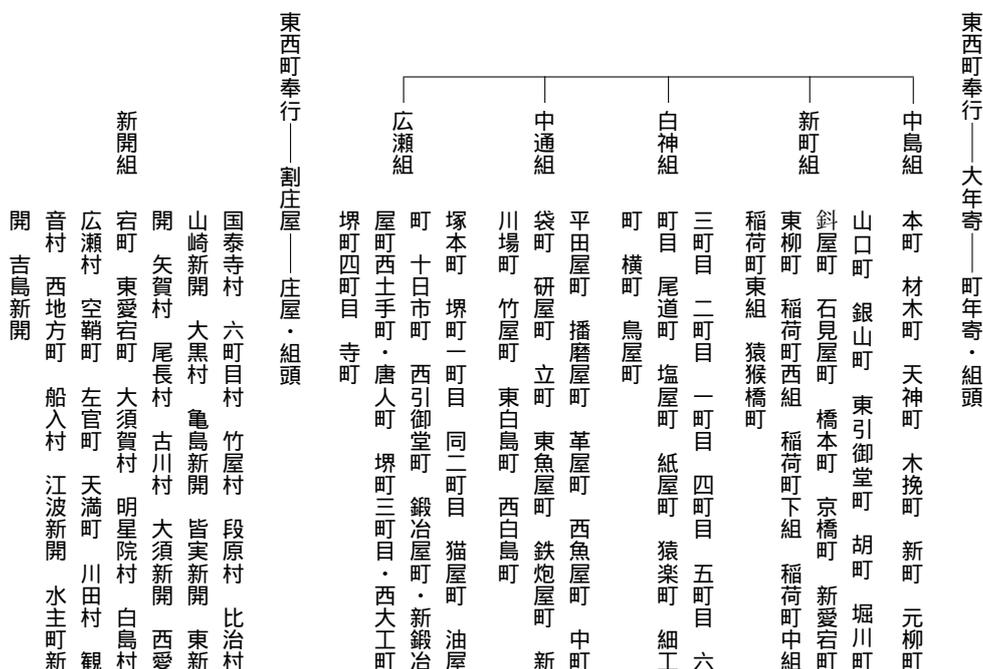


図1 広島城下の支配組織（文政年間頃）

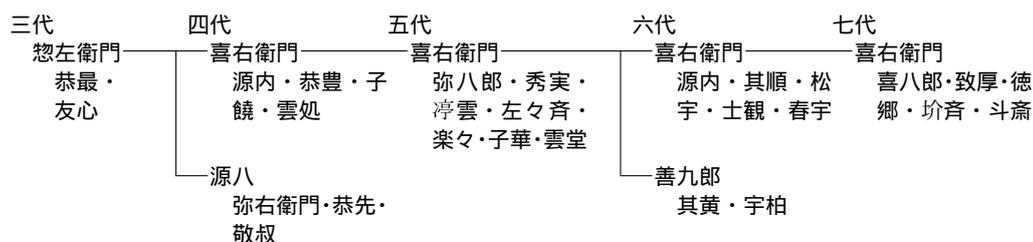
また、平成元年4月3日から8月5日まで県立文書館の特別展示室で開催した第1回企画展「広島城下の町組と商人文化」では、寄贈された18点の岩室家文書のほか、岩室家から12点を借用し、展示することができた。

以下、寄贈された岩室家文書の利用の便をはかるため、岩室家の来歴とその活動、そして文書の概要を簡単に述べ、この文書目録の解説としたい。

## 2 岩室家について

文政12年(1829)に成立した、広島城下の地誌「知新集」(『新修広島市史』第六巻所収)によれば、岩室家の祖である岩室弥兵衛は、近江国(滋賀県)の生まれで、浅野長晟が紀州和歌山から、改易となった福島正則にかわって広島に入城した元和5年(1619)、母と、子の半右衛門、弟の市郎兵衛とともに広島城下山口町(中区幟町・胡町・銀山町付近)に移住し紺屋を開業したという。二代の宗左衛門に至って、家号を室屋として酒造業へ転業し、以来代々それを家業とした。岩室家の略系図は次のとおりである。

岩室家略系譜



岩室家では、寛文年中(1661~1673)にはじめて二代宗左衛門が山口町の町年寄に任じられてから、代々町年寄役や大年寄役を勤め、また、綿改所頭取として綿改所改革に直接参画するなど、藩の財政・金融政策に参画した。宗左衛門以降の町役の在任期間と、藩からの賞賜などについてまとめると、次のとおりである。

代・名前	年代	役職等
二代 宗左衛門	寛文年間(1661)~元禄13(1700)	新町組山口町町年寄
三代 惣左衛門	宝永3(1706)~ 享保8(1723)7.12~延享4(1747)7.9 享保18.6.28~享保18.7 延享4.7.9	" 新町組大年寄 中通組支配大年寄諸道具引受 永年勤続の勞により金5両を賜わり、隠居後も年頭御目見を免される
四代 喜右衛門	享保17.9~ 延享4.7.9~宝暦14(1764)5.28 宝暦5.12.21  宝暦6.7.11~ 宝暦10	才覚銀御用13人組に選ばれる 新町組大年寄 相場会所創設の勞を賞せられ袴地丹後縞1疋を賜わる 綿会所引受方 相場会所副
五代 喜右衛門	~宝暦14.7.25 宝暦14.7.25~ 宝暦14.7.25~寛政元(1789)4.27 安永元(1772)7.16~安永6.3.1 安永9.11.21~安永9.12.27 寛政元.4.27  寛政元.11.13~寛政9.9.8 寛政9.12.29	綿会所銀元役 綿会所引受 新町組大年寄 中通組大年寄兼帯 " 永年勤続の勞により銀5枚を賜わる 六代 喜右衛門大年寄役後見 隠居、後兄役中の精勤を認められ、金5両を賜わり、隠居後も年頭御目見を免される
六代 喜右衛門	寛政元.11.13~寛政9.9.8 寛政9.9.8~文政8(1825)11.22	新町組大年寄見習 新町組大年寄
七代 喜右衛門	文政3.2.16~文政9.2.5 文政9.2.5~明治2(1869)5.1	新町組大年寄見習 新町組大年寄

文政11.10.24～文政12.12.21	中通組大年寄兼帯
天保4(1833)6.1～明治2.5.1	大割方掛り
天保8.12.1	多年の出精などを賞され、格別に在職中苗字御免となる
天保14.6.23	永代苗字御免
弘化3.4.3	明星院祈祷堂再建の功により金3両を賞賜される
嘉永2.12.15	御用銀一切献上を賞され褒詞を賜わる
嘉永4.3.12	昨夏洪水の節尽力に対し褒詞を賜わる
安政3.5.17	異国船防御の御用銀献上に対し12人扶持を給う
文久3.12.29	3500両献納に対し俸42口を加増され、永代座順銀札元次、苗字御免、生涯帯刀御免を命ぜられる。
?～文久4(1864)2.18	中通組大年寄兼帯
七代 喜右衛門 明治2.6.20～(明治5.1)	広島町東組支配大年寄見習

「知新集」二(『新修広島市史』第六巻資料編その一)、『広島市史』第二～四巻による。

なお、岩室家の歴代当主や一族は、いずれも著名な教養・文化人でもあった。四代喜右衛門とその弟源八は高名な漢詩人であったほかは、代々俳諧を嗜み、さきにも触れたように、岩室家には多数の先祖の文芸作品とともに、広島城下を始めとする各地の富裕な町人たちの作品が残されている。彼らは相互に交流し、自らの学芸の水準を高めようとしたのであろうことが推測される。岩室家に伝わる、江戸時代中期の「岩室家蔵書記」(複製資料あり)に載せられている蔵書は、詩歌・俳諧はもちろんのこと、文学・字書・歴史・医学・地誌・芸能など多分野にわたり、当時の大商人の豊かな教養の一端を示している。

安永2年(1773)に、当時もっとも著名な詩の結社であった賜杖堂の江村北海が、元和から安永までの漢詩作家を網羅し、その代表作を再録した「日本詩選」の続編に、四代喜右衛門(諱は恭豊)とその弟源八(諱は恭先)の作品が収載されているので、それをあげておく(汲古書院刊『詞華集日本漢詩』第二巻)。

擬<sub>レ</sub>送 人遊<sub>レ</sub>洞庭<sub>一</sub> 室恭豊  
扁舟湖上去、別酒惜<sub>レ</sub>離群<sub>一</sub>、秋暮洞庭水、寒高夢沢雲、丹楓憐<sub>レ</sub>楚客<sub>一</sub>、明月吊<sub>レ</sub>湘看<sub>一</sub>、琴調彈<sub>レ</sub>清夜<sub>一</sub>、幾回愁裏聞

(巻之二 五言律詩)

長安月 室恭先  
万戸千門夜色流、寒砧声度鳳凰樓、涼風到处天如<sub>レ</sub>水、望断長安明月秋  
寄 田君赫在<sub>レ</sub>滄浪亭<sub>一</sub> 仝  
故人信宿古江村、羨爾風流此避<sub>レ</sub>喧、聞説山中無<sub>レ</sub>長物<sub>一</sub>、自雲明月滿<sub>レ</sub>紫門<sub>一</sub>

(巻之七 七言絶句)

### 3 岩室家文書の概要

県立文書館に寄贈された56点と、岩室家に残された学芸関係を中心とする「私的」文書を含めた岩室家文書は、戦災によって失われることなく、岩室家で長櫃などに入れられて大切に保存されてきたため、若干微などによる損傷は見えるものの、虫害は極めて少なく、保存状態は良好といえる。寄贈を受けるにあたって長櫃はそのまま岩室家に残された。文書の整理は寄贈者岩室良氏の祖父にあたる謙吉氏や、広島県史編さん室などによってすでに行われていたため、原形のままとはい言いがた。また、県史編さん室でマイクロ撮影したものの中でも、「通り御祭礼御触書抜」(明和2)、「明星院御祈祷堂祠堂銀利息勘定帳」(文政9～12)、「教禅院祠堂銀勘定帖」(文政11・12)については寄贈を受ける際に、すでに見ることができなかった。

寄贈された古文書の目録を作成するにあたって、まず、(1)支配、(2)戸口、(3)町、(4)東照宮祭礼、(5)学芸・風聞書の4つの大項目を立て、(3)については、さらに①町役人、②財政、③交通の小項目を立てた。次に、各項目の資料のうち主要なものについて簡単に紹介しておきたい。

(1)には、享保11年(1726)に町方に対して出された詳細な儉約令に対して、室屋において翌年の年中行事からどのように具体化するか、その仕法などをまとめたもの〔1〕、同様に寛政2年(1790)に町方へ出された儉約令の写し〔4〕、天明元年(1781)に城内二之屋敷内に開設された、藩の「学問所」諸日課の規程書や、諸職員の執務章程を記したもの〔3〕がある。この〔3〕の「学問所」は、陪臣や庶民に対しても限定的ながら開かれていたため、岩室家でもこれが書写され残されたものであろう。

次に、(2)の2つの資料は、新町組の各町年寄から大年寄に対して各町の人数の増減を報告し、それを取りまとめたものである(ただし〔5〕は京橋町以下の安芸郡部分に限られる)。

目録の大部分を占める(3)のうち、①は、4代〔7〕・5代〔8・9〕の大年寄在任中の役員記録、〔10・11〕は、7代が大年寄本役、8代が大年寄見習に任じられたときの一件書類の控書である。〔12・14・15〕は、いずれも辰年(年不明)に町年寄から出された願書であり、両端に目打ち穴が残っているところから、豎冊に編綴されたものの断簡と見られる。広島城下町では、宝暦8年以降、町組や各町の運営を行う大割銀・小間銀や、藩に納められる水主役銀、その他の諸積銀の額は一定とされて定格銀とよばれ、五組大年寄から出される大割年番がその経理に当たり、水主役銀を藩庫に納入した残りを町組全体の運営に当てていた。②の資料は、多くがその町組運営の勘定書である。③は、元禄・享保期に、西国街道(山陽道)を上下する西国大名の家臣・使者に対して、新町組京橋町で提供した駕籠・人足代の取替銀の帳簿〔40, 43~51〕などである。

(4)は、50年ごとに尾長東照宮で行われた大祭礼、「通り御祭礼」に関する資料である。寛文6年(1666)、明和2年(1765)、文化12年(1815)に行われたこの「通り御祭礼」では、本宮から広瀬神社(現広島市中区広瀬町)の御旅所まで神輿が渡御し、五組からも案内の町大年寄や華麗な石引行列が参加したため、沿道には町民が詰めかけ大いに賑わった。〔55〕は、文化12年の祭礼において、中通組平田屋町・研屋町年寄等から提出された祭礼入用銀の勘定帳で、町方負担の一端を示すものである。五組が作成した石引台の引試しに要した費用などを見ることができる。

(5)は、岩室家に残された学芸・文芸関係の多くの資料のうちの一部である。〔19〕には、関ヶ原・大坂の陣などに出陣した浅野家家臣名簿とともに、広島入封以前、長政・幸長・長晟三代に仕官した者107名の由緒を載せている。『芸藩輯要』と併せて検討すると興味深い。〔24~26〕の風聞書は、いずれも表紙や奥書に「寛山」の名が見え、同人物の筆によるものである。

#### 4 おわりに

以上、岩室家文書の伝来の経緯と同家の来歴、そして文書の概要を概括的に述べてきたが、同家のとくに学芸に関する活動については、現在も岩室家で所蔵されている資料も丁寧に整理し、検討しなければならない。しかし、いずれにしても、戦災や原爆によって多くの広島城下町に関する資料が灰燼に帰したことを考え合わせると、これらの資料は数少ないかけがえのない歴史遺産といえよう。利用者は、この点を十分に認識した上で利用していただきたい。

この解説の執筆にあたっては、文書寄贈者の良氏の母上にあられる岩室純子氏から多くの御教示をいただいた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

#### 参考文献

『広島県史』近世1・2、『新修広島市史』全七巻、『広島市史』第二~四巻、『国史大辞典』(吉川弘文館)

(西村 晃)

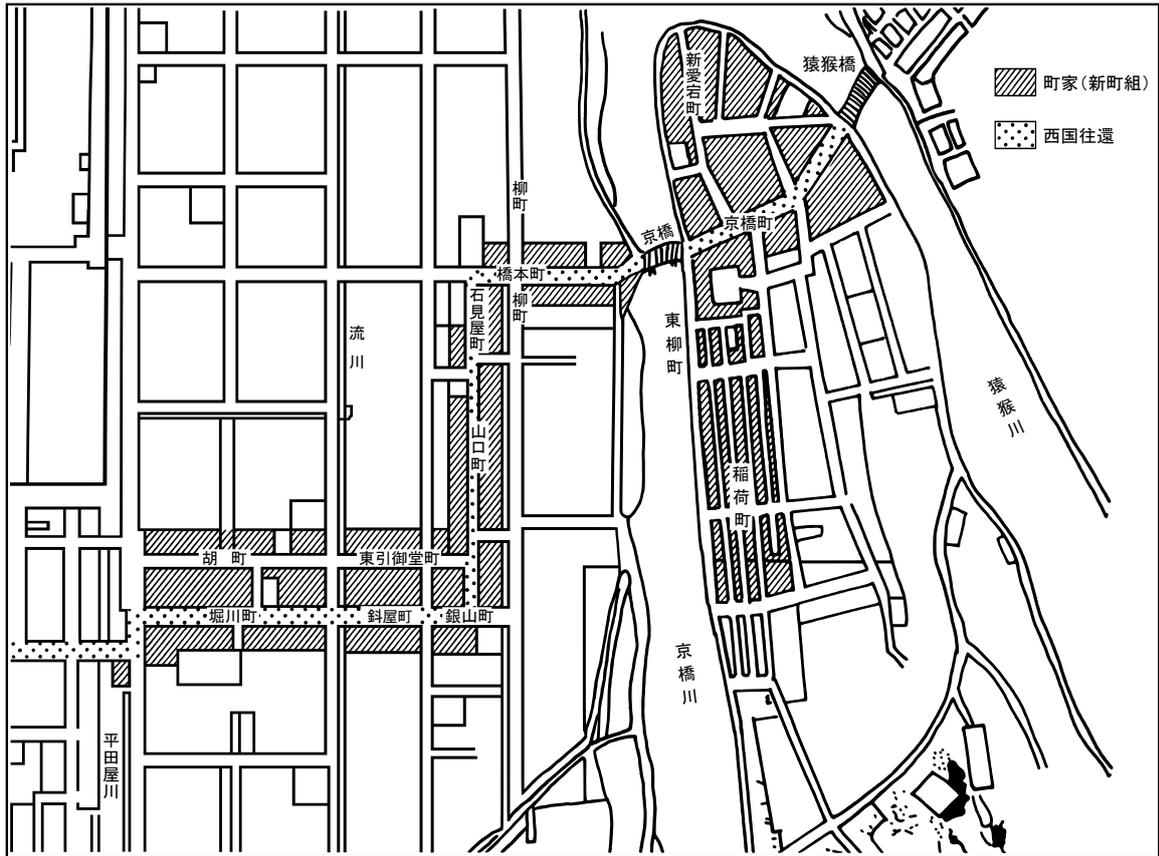


図2 天明年間の広島城下新町組絵図

番号	表題	年代	作成	形態	数量
<b>支配</b>					
1	御俵約被仰出候二附家内俵約相改儿年中行事帖	享保11.12.吉		縦冊	1冊
13	奉公人言々年切符之定	(享保頃)正.24	(明石)弥一右衛門・(竜神)武左衛門 五組大年寄	縦冊	1冊
3	学問所略式	天明 2.正.	植田守衛・加藤三平・金子源内・増田来次・頼弥太郎・香川脩蔵	縦冊	1冊
4	御家中并二諸向町郡とも一統被仰出候節町方江被仰付候御書付写	寛政 2. 3.		縦冊	1冊
<b>戸口</b>					
5	安芸郡之内町組之分大人数寄せ帖 新町組	文政 5. 2.		縦冊	1冊
6	〔新町組人数寄せ綴〕	嘉永 3. 3.晦	岩室喜右衛門殿	綴	1綴
<b>町(町役人)</b>					
7	延享四乙卯七月九日新町組大年寄役被為仰付候趣并諸役方覚書并自分江懸り候手紙贈答扣	延享 4 ~ 宝暦11	室屋源内	縦冊	1冊
2	繰綿会所御用被仰付候諸覚書	宝暦 6. 7.		縦冊	1冊
8	公用并二自分用記録	宝暦14. 6.( ~ 明和2.12)	岩室秀実(喜右衛門)	縦冊	1冊
9	役用手元之記録	明和 3 ~ 5明和 8 ~ 安永 2安永 7	岩室秀実	縦冊	1冊
10	大年寄見習室屋喜八郎殿御本役被仰付候諸事一卷控	文政 9. 2.		横長	1冊
11	〔岩室喜右衛門忰弥八郎大年寄見習被仰付候一件扣〕	天保12.12. ~ 同13.1.		横長	1冊
14	覚(改名願書) 縦冊断簡	辰. 8.18	株中買十兵衛 小頭茶屋惣十郎殿他3名 奥書 茶屋惣十郎他3名 室屋喜右衛門殿	縦紙	1通
15	覚(納屋普請赦免願書) 縦冊断簡	辰. 8.23	京橋町大崎屋多貫 年寄繩屋九左衛門殿 奥書 年寄繩屋九左衛門 室屋喜右衛門	縦紙	1通
12	奉願口上之覚(兼役銀山町年寄赦免願書) 銀山町 縦冊断簡	辰. 9. 7	年寄笠岡屋善太郎 室屋喜右衛門殿	縦紙	1通
<b>町(財政)</b>					
27	広嶋町中江銀取替帖	享保 4. 5.( ~ 享保9.10.)	惣代新右衛門・与右衛門他五組町年寄 芥川屋平八殿	縦冊	1冊
28	五組用場働銀最初一組限銘々勘定之筋之分合帖			綴	1綴
28/1	○五組用場働銀勘定帖 広瀬組	安永 3. ~	亥年当番広瀬組	縦冊	(1冊)
28/2	○五組用場働銀勘定帖 中島組	安永 5.正. ~	中島組 広瀬組	縦冊	(1冊)
28/3	○五組用場働銀勘定帖 中通組	安永 6.正. ~	中通組 広瀬組	縦冊	(1冊)
28/4	○五組用場働銀勘定帖 白神組	安永 7.正. ~	白神組 広瀬組	縦冊	(1冊)
28/5	○五組用場働銀当組年番勘定帖 新町組	安永 8.正. ~	新町組	縦冊	(1冊)
29	五組用場支配御役方銀諸勘定寄書	享和 3.正.		縦冊	1冊
30	五組用場支配御役方銀諸勘定寄せ書	享和 4.正.		縦冊	1冊
31	文化三寅年勘定(五組用場) 後欠	(文化 4カ)		縦冊	1冊
32	文化六巳年勘定(五組用場) 年番広瀬組	文化 7. 2.	三国屋栄次郎・室屋喜右衛門・三原屋三郎右衛門・茶屋次郎右衛門・対馬屋七郎右衛門	縦冊	1冊

番号	表題	年代	作成	形態	数量
33	文化七午年勘定(五組用場) 年番白神組	文化 8. 2.	三国屋栄次郎他4名	豎冊	1冊
34	五組定格續銀午年分諸払勘定帳 年番白神組	文化 8. 2.	三原屋三郎右衛門・勘定手伝三町・壱町目年寄小嶋屋伴蔵奥書 三国屋栄次郎他3名	豎冊	1冊
35	五組定格續銀申年分諸払勘定帳 年番新町組	文化10. 2.	室屋喜右衛門・勘定手伝山口町年寄仲屋兵右衛門 奥書藤井栄次郎他3名	豎冊	1冊
39	〔五組用場雄大割方貸附銀并才覚借入銀出入勘定帳〕	酉(文化10)2.	藤井栄次郎・室屋喜右衛門他3名	豎冊	1冊
36	五組定格續銀子年分諸払勘定帳 年番白神組	文化14. 2.	三原屋三郎右衛門・勘定手伝三町目壱町目年寄小島屋伴蔵奥書 藤井栄次郎他3名	豎冊	1冊
37	五組定格銀丑年分諸払勘定帳 新町組	文化15. 2.		豎冊	1冊
38	五組用場働銀勘定帳	文政12.正.	三原屋三郎右衛門 室屋喜右衛門殿 奥書 藤井屋右衛門他3名	豎冊	1冊
町(交通)					
40	往来掛増取替銀目録 新町組京橋町	元禄13. 4.	京橋年寄九左衛門 伊予屋新助殿	豎冊	1冊
41	御巡見当町御止宿之刻諸入用銀大割算用詰之帖	宝永 7.極.25	芥川屋平八 小鷹狩金大夫様・団弥五右衛門様	豎冊	1冊
42	就朝鮮人来聘帰帆紙筆墨蠟燭其他入用銀帳 中通組鉄炮屋町	正徳 2.正.25	支配人鉄炮屋町年寄久兵衛三原屋清三郎殿	豎冊	1冊
43	西国御大名様方御家来衆往来掛増取替銀帳 新町組京橋町	正徳 5.極.24	京橋町年寄彦右衛門 伊予屋吉左衛門殿	豎冊	1冊
44	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増銀取替帳 新町組京橋町	享保 5.11.14	京橋町年寄友屋彦右衛門 芥川屋平八殿	豎冊	1冊
45	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ取替帖 新町組京橋町	享保 8. 9.18	京橋町年寄友屋彦右衛門 室屋喜右衛門	豎冊	1冊
46	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ銀取替帖 新町組京橋町	享保 9.10.	京橋町年寄友屋彦右衛門 三原屋新三郎殿	豎冊	1冊
47	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ銀取替帖 新町組京橋町	享保11.11.	京橋町年寄友屋彦右衛門 芥川屋平八殿	豎冊	1冊
48	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ銀取替帖 新町組京橋町	享保12.10.	京橋町年寄友屋彦右衛門 室屋喜右衛門殿	豎冊	1冊
49	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ銀取替帖 新町組京橋町	享保13. 9.	京橋町年寄友屋彦右衛門 三原屋新三郎殿	豎冊	1冊
50	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ銀取替帖 新町組京橋町	享保14.閏9.	京橋町年寄友屋彦右衛門・組頭繩屋七兵衛 芥川屋孫右衛門殿	豎冊	1冊
51	西国御大名様方御家来衆并御飛脚人足掛ケ増シ銀取替帖 新町組京橋町	享保15. 9.20	京橋町年寄友屋彦右衛門 芥川屋平八殿	豎冊	1冊
52	土御門殿内岡監物様逗留一件	文政 6. 3. ~		横長	1冊
53	御使者宿人夫之帖			横長	1冊
東照宮祭礼					
54	通り御祭礼書類書抜	明和 2.		横長	1冊
56	〔通り御祭礼御行列綴〕			綴	1綴(2冊)
56/1	○渡御御行列	(明和 2.)		横長	(1冊)
56/2	○還御御行列	(明和 2.)		横長	(1冊)
55	東照宮通り御祭礼二付諸仕構并調物等之諸御入用銀勘定帳 一冊	文化12.極.	平田屋町・研屋町年寄塗師屋勘兵衛,組頭並安田屋理右衛門 室屋喜右衛門殿	豎冊	1冊

番号	表題	年代	作成	形態	数量
学芸・風聞書					
16	福嶋遠流之筋城受取渡之聞書 全	寛保元.梅.吉	備後東城住 川村本矩	豎冊	1冊
17	太閤秀吉公御遊宴 全(並名護屋山之芝居興行の事)			豎冊	1冊
18	正一位豊臣関白平太閤秀吉公御崩薨之節諸将へ神文并御遺言之書拔 全			豎冊	1冊
19	浅野家御藩中簿 全 並福島正則公記	安政 7.仲春写	大江寛山写	豎冊	1冊
20	[豊臣秀吉葬式行列記・義経従平分限・芸備両国浅野公江被下候事芸陽記抜書他]			豎冊	1冊
21	広嶋開基	癸酉(寛永10ヵ)8.13	亀田大隅守高継今手屋徳右衛門所持	豎冊	1冊
22	古今烈女伝			豎冊	1冊
23	源氏物語 全(東叡山造立) 甲立三上氏所持			豎冊	1冊
24	復古溜 全(赤穂義士・大塩平八郎乱他)			豎冊	1冊
25	復古綴集 全(安政大地震・悪病流行之(幕末)事・異船入津変災考他)			豎冊	1冊
26	[寛山見聞録](桜田門外の変風聞書他) (幕末)			豎冊	1冊